

カロッサの『日記』（1916年）について

八 木 輝 明

I

第一次世界大戦は、オーストリアの帝位継承者フランツ＝フェルディナント夫妻がオーストリアに併合されたボスニア州サライエヴォで暗殺されたことに端を発し、1914年7月末にオーストリアがセルビアに宣戦布告してはじまった。その後三国同盟でオーストリアを支援するドイツが、セルビアの後ろ楯となるロシアに、さらにロシアと同盟を結ぶフランスに宣戦布告し、ベルギーを侵攻して北フランスに進撃した。北フランスでイギリスがフランスとともにドイツに対し戦端を開くと、以後主にヨーロッパの国々が連鎖反応的に参戦し（最終的には25カ国が参戦）、4年半の長期間にわたる大規模な総力戦となった。歴史の上でもこれほどおびただしい戦死者（一説には900万人）を出した戦争はこれまでにない。史家によってはこの大戦を殺戮の世紀（20世紀）の幕開けと呼んでいる¹⁾。

南ドイツの小さな町パッサウ在住の医師カロッサ（当時37歳）は、この戦争に志願し、1915年9月はじめからアウクスブルクで軍事教練を受け、1916年9月北フランスの戦地（西部戦線）に赴く。当時北フランスではソンム河流域で英仏軍とドイツ軍との激しい戦闘が続いていた。しかしカロッサは10月中旬ルーマニア（東部戦線）へ移動を命じられる。ルーマニアは

1) 『20世紀の歴史 第一次世界大戦』上・下 平凡社 1990

すでに8月に、ルーマニア系住民が多く住むトランシルヴェニア地方の領有をねらってドイツ・オーストリアに対して戦争状態に入っていた。

カロッサは1917年9月まで東部戦線にとどまり、再び北フランスへと転戦し、1918年4月左腕に負傷して軍務をしりぞいた。1924年に出版された『ルーマニア日記』は、このはじめの1916年10月4日から12月15日までの前線での体験にもとづいた日記文学、戦争文学と言われている。

『ルーマニア日記』の訳者でもある高橋健二は、やはりこの時期の戦争文学であるレマルクの『西部戦線異状なし』（1929年）に言及しつつ次のように述べている。

量的にはこの通り小さいものであるが、『ルーマニア日記』は、第一次大戦後続出した戦争文学中後世に残るほとんど唯一のものであろう。その当時は随分センセーションを起こした「西部戦線異状なし」でさえ、今日となつてはほとんど読まれない。レマルクは「凱旋門」の作者として通っているのである。そのほかの戦争文学や記録文学については、ことさら述べるまでもない。すべて過去のものとなった。

陰惨な冬のルーマニア戦線に、生死のあいだをさまよいながらも、カロッサがいつも柔軟で素直で明るい心を失わずにいるのに、読者は心を打たれずにはいないであろう。文字どおり砲煙弾雨の血なまぐさいちまたにあつて、彼がどんなに澄んだ弾力のある心で、自然と人間とを静かに見つめ、ささやかなものの中にも深い意味と美しさを読み取っているかを知る時、おのずと彼に対して頭がさがって来るのである²⁾。

時代小説の名手藤沢周平もあるエッセーの中で『ルーマニア日記』について「『ルーマニア日記』は私にある種のくつろぎと勇気をあたえるものだった。戦場小説である『ルーマニア日記』にも、当然死はひんぱんに出て

2) 『ルーマニア日記』高橋健二訳 岩波書店 1953 162-163頁

来る。だがカロッサは始終余裕をもってその死を語っていた」「人間についての深い洞察と同情、そこはかたないユーモアとうつくしくきびしい自然描写からなる珠玉のような戦記文学『ルーマニア日記』と語っている³⁾。のちにナチスからは、カロッサのこの作品内にある平和主義的姿勢が非難されることにもなったが、しかし高橋健二や藤沢周平の『ルーマニア日記』にたいするほとんど手放しともいえる賛辞は、戦後日本のカロッサ愛読者の代表的な感想といえるだろう⁴⁾。ちなみに現在は戦争文学としてレマルクもカロッサもほとんど読まれていないかも知れない。ただ日本ではレマルクの『西部戦線異状なし』の方は今だに新潮文庫から出ていて、以前には映画化もされ、よくリバイバル上映されている。カロッサの『ルーマニア日記』は文庫本で時おり復刊されるくらいで、書名もほとんど忘れられている。

しかしこの『ルーマニア日記』には、実際に従軍しながら手帳に書きとめた『日記』が残されている。カロッサが戦地にいた全期間のものではないが、『ルーマニア日記』と重なる時期の出来事がとくに克明に記されて残っている。それがこれから紹介しようと思う1916年の『日記』である。

カロッサの『日記集1』(„Tagebücher“ 1910–1918)が公刊されたのが1986年、またこの時期の手紙をおさめた『書簡集1』(„Briefe“ 1886–1918)は1978年に初めてインゼル書店から出版されたので、第二次世界大戦以前から戦後にかけての日本の読者は『ルーマニア日記』を手がかりとして作家カロッサの像を作り上げるしか方法はなかった。しかも初期の作品『ドクトル・ビュルガーの運命』、『幼年時代』からはじまる青春四部作、さらに『指導と信従』といったカロッサの代表作のほとんどは自伝的要素の強い小

3) 藤沢周平『ふるさとへ廻る六部は』新潮文庫 1995 237–241頁

4) 戦前、戦後〈第二次大戦〉の日本でのこうしたカロッサ受容に関しては拙稿『『異質な世界』について——カロッサの戦後評価をめぐる——』(『日吉紀要/ドイツ語学・文学』第30号 2000)ですでに述べた。

説ないし回想記であるため、作品の中にカロッサの実像の多くを読み取ろうとする研究や解釈がこれまでの大勢を占めていた。しかし『書簡集』『日記集』が公になった現在、この作家の全体像に近づくことが可能になり、様々な作品の機微が明らかになるであろう。以下はその試みであり、カロッサという二十世紀前半を生きた人間にどれくらい迫れるか、私の理解力の深度を測る実験でもある。

II

カロッサは作品を完成させるまで長い年月をかけた。遅筆と言えそれまでだが、執筆、完成までにかなりの時間を費やすにはそれなりの理由があると思われる。カロッサはバイエルン州の小さな町で育ち、ランツフートのギムナジウムに寄宿生として過ごし、ミュンヘン大学医学部に学び、その後主に病気がちな父の代わりにパッサウで医師（心臓と肺結核の専門医）として開業し、近郊のゼーシュテッテンに住居を持った。ミュンヘンは医学部の学生生活を送った後も芸術家との交流の地としてよく行き来し、関わりのあった町だが、カロッサはベルリンという大都会をほとんど知らなかった。どちらかというとのどかで美しい自然に取り囲まれたバイエルンの田舎町で医師として生活し、かたわら多くの詩を書き、文芸誌に投稿して二十歳代を過ごした。そして生涯にわたって継続した医療活動の中で着想を得、推敲をくり返し、作品として結晶させる作業を行なっていた。しかしカロッサの遅筆には、医師としての多忙な生活、空間的にはのどかな南独の風土と田園生活といった外面的な側面からだけでは説明できない、作家としての気質も大きく作用している。

彼の作品は、そのいくつかに「生活報告」「ある回想の書」という副題が付けられているように、自伝的要素を色濃く持っていて、そうした著作の場合、過去の実在の人物をどのようなスタンスで描くかという問題が常にあった。その人物が作家にとってネガティブで非難の対象である場合には一層難しい問題になる。そのために批判の対象となる人間を時間というふ

るいにかけて整理・浄化し、記述できる形に変容させる。作中の人物を平衡感覚を持って描き出せるまで待つ。時に賞賛したり、ユーモラスに描くことはあっても、カロッサはある人物を非難めいて風刺することがほとんどなかった。このことが推敲が入念であるということとは別に彼の遅筆のもうひとつの理由になっているように思われる。いずれにしても彼のこのような姿勢から、独特のリズムを持った、抑制のきいた静謐な文体、「澄んだ弾力のある心で、自然と人間とを静かに見つめ、ささやかなものの中にも深い意味と美しさ」(高橋健二)を感じとる文章が生まれてくる。

いずれにしても着想からの正確な時期を特定することはむずかしいが、詳しい年譜を見ると、多くの作品の執筆には平均約3年の年月を費やしている。とりわけ『ルーマニア日記』の場合、この戦争体験のさなかで日記を書いた1916年から出版まではほぼ8年かかっている。同時期内に並行して書いていた『幼年時代』も着想から決定稿出版までやはり8年の歳月がかかっている。『幼年時代』についてはいずれ別の機会に論じるとして、出版までにこれほどの時間をかけた『ルーマニア日記』の原本とも言われる『日記』は、その時の戦況、転戦した土地の人々、体調、天候の変化、風景の移り行きなどが刻々と述べられていて、時間のふるいにかけていない分カロッサのその時々気持ちがストレートに伝わってくる。この点だけでもカロッサという作家を知るうえで貴重な記録といえる。さらにこの『日記』に登場してくる司令官、司祭に対しては、まだ作品として記述できるまでの〈時間による距離〉を十分置くことが出来ないまま記述されている。このことも後で詳述してみたい。

この『日記』は小型の手帳に書かれて残されていたもので1916年8月31日から1917年1月1日までの正味四ヶ月にわたっていて、ほぼ連日書かれている。写真集でこの手帳のあるページを見ると風雨にさらされて判読不可能の箇所もあり、前線での軍医としての務めの中でよくこれだけの日記が残せた、という印象を受ける⁹⁾。『日記』が収められている日記集第一巻(Tagebücher 1910-1918)には前年1915年9月7日から1916年8月30日まで

の日記とそのあと1917年1月2日から7月9日までの日記が欠如している。この日記集の編集者であるカロッサの娘エーファ・カンブマン・カロッサによれば、この時期の日記は実際残されていないという。

ハンス・カロッサが日記を書いたのは自分自身のためであって、ヘッベルが言うように将来の伝記作者のためではない。(……)いくつかの作品で日記という表現形式をもちい、他の作品でも自分の人生の諸相を跡づけようとしたカロッサにとって、メモ帳としての日記は資料収集のためであり、作品執筆の準備作業であって、決して出版を意図したものではない⁶⁾。

カロッサが手記としての日記を取捨選択したのは、その生活状況に理由があった。また個人のプライベートに関して暗示以上のことを日記の中に残すのは彼の生き方にあわなかったであろう。とくに感情的に起伏の激しい人生局面でカロッサはこうした姿勢をつらぬいた⁷⁾。

全般的に見ると彼の日記は数行だけの書き入れのものが多く、しかし日によっては半ページから1ページの長さのものもある。それと比較するとこの『日記』全体は毎日1ページから2ページに及んでいて、その点でも『ルーマニア日記』のためのメモ帳、備忘録として書いていたことがわかる。

「個人のプライベートに関して……」というこの箇所はこの章のはじめに述べた〈時間のふるい〉にかけて対象につねに冷静な距離を取るこの作家の姿勢と共通している。日記に関してカロッサは書き残さない年もあったようだが、みずから破棄したものもあるようだ。とくに1915年9月から

5) „Hans Carossa Leben und Werk in Bildern und Texten“ Insel Verlag 1993 S.128f.

6) „Carossa Tagebücher 1910–1918“ Insel Verlag 1986 S. 645

7) „Carossa Tagebücher 1925–1935“ Insel Verlag 1993 S. 654

の一年間をアウクスブルクで過ごした際の日記は恋人マリア・デームハルターとの出会いの記録を含むはずだが、残念なことに残っていない。おそらく破棄したものと推測される。その分しかし彼女へのカロッサの思いは、残された書簡から十分うかがい知ることができる。マリア・デームハルターに関してはⅣ章以降で触れるが、このアウクスブルク期の日記がないのはおそらく相手のプライバシーの問題もあるが、それよりもカロッサ自身のプライベートな部分があまりにも多く含まれているからだと思われる。

さてこの『日記』が出版を意図したものでなく、のちの作品の資料であり、メモ帳であり、苛酷な戦場の取材記録であるということは、ある程度認めなければならない。西部戦線から東部戦線に移動する際の自然描写（例えば、霧の動き、月の様々な形と照度、日の出と空の色、雲の変化と色合い、降雪の状態、木々の種類等々）は、別の詩作品のためのデッサン、下書きという趣が強い。つまり詩人としての感覚と言葉を磨くための習作ノートとして見る事が出来る。また『ルーマニア日記』の中にある、精神に異常をきたした兵士、ルーマニアで夫、子供を失って気がふれた女性たちの描写も、そのもとはこの『日記』の記述にある。このふたつの「日記」の相互関係を極端な形で位置づけるとカロッサ全集の訳者金子隆吉氏のように「結局『ルーマニア日記』は、その題材を本来の『日記』から汲み出してきてはいるものの、内容的にも文体的にも『日記』とは大幅に異なった独立した作品なのである。『ルーマニア日記』は、実は作者自身の戦争体験の忠実な〈記録〉などでは決してなく、本格的な〈創作小説〉だったのである。」という見方も可能になる⁸⁾。

カロッサは『ルーマニア日記』執筆当時いくつかの手紙の中でこの作品について次のように説明している。

私の戦争日記は、たんなる思い出を書くのではなく、精神的発展（成長）

8) 『ハンス・カロッサ全集』7 臨川書店 1996 268頁

を描こうとするものです。

(……) お送りした戦争日記〈「60日間」〉の抜粋があなたを感動させた、と伺ってとても嬉しく思います。もちろん私の意図は、戦場でのたくさんの事実を集めたり、戦争の残酷さを描いたり、その上戦争を告発することではありません。詩人の務めは、生々しい激動の世界で、魂がその生まれながらの品位と視線と方向性を保ち続けていくことがどこまで出来るかを描くことにあると思うのです。それに成功するかはわかりませんが、試みる価値はあるでしょう。

『戦争日記』は次第にはっきりした形を取り始めました。とりわけ私にとって大切なことは、戦地での人間関係の背景を描き出し、戦争というものを新しい光の中に浮かび上がらせることです。それが出来るのは私のように敵兵を殺す必要のない、戦場で唯一中立の立場をとれる医者だけになしうることです。

『ルーマニア日記』はありのままの現実であり同時にまったくの創作であるとも言えるでしょう。その点が独自なところかも知れません⁹⁾。

『ルーマニア日記』のタイトルが定まらず『60日間』という題名も考えられていたことがわかるが、ここには1916年の『日記』を『ルーマニア日記』へと〈創作〉するにあたっての根本的意図、心構えが語られている。さらにこの書簡には、カロッサの全作品に共通する基本的な執筆態度が述べられているように思われる。作品ではつねに「精神的発展」を描くこと、どのような状況にあっても魂の「品位と視線と方向性を保ち続け」ること、単に現実の「残酷さを描」きそれを「告発する」ことは主旨ではなく、ま

9) „Hans Carossa Briefe II 1919–1936“ Insel Verlag 1978 S. 19, S. 29, S. 31, S. 56

たこの戦争日記が「創作であるとも言える」こと、それは彼のような「敵兵を殺す必要のない、戦場で唯一中立の立場をとれる医者だけになしうる」という自己認識と構想が明記されている。とくに彼の主著である青春四部作に共通して言えることは、作品の中でつねに自己を客観化して、その精神的発展を追い求め、リアルな現実をそのまま提出したり告発したりしないという点である。作品の創作性について立ち入って論及することは、別の機会にゆずるが、カロッサの自伝的作品には多分に想像力による虚構性が入り込んでいる。あるいは精神的発展を描くためにカロッサは物語りという虚構性を必要としていた、とだけここでは述べておこう。このように見てくると、二つの日記の関連性についての先ほどの金子氏の指摘は、まさしくカロッサの意図したことが作品として実現されていることを逆に裏付けていることになる。

しかしすでに述べたように、前後の年月の日記が欠如しているなかでこの『日記』だけが破棄されずに残されたのはなぜであろうか。『ルーマニア日記』創作のための資料、題材として長い間作家の手元にあったことはわかったが、その後なぜ破棄しなかったのかは、以下の章で述べるようにやはり謎である。そして大切な点は、この『日記』がはたしてメモ帳、手記としての価値しかないのでしょうか。戦線での単なるルポルタージュにすぎないのでしょうか。実はこうした疑問はそもそも私がこの小論を書く出発点にあった。

III

四ヶ月間の『日記』の中で注目すべき人物が二人いる。ひとりとは司令官のクッシェル、もう一人は従軍司祭のマイアーである。すでに述べたようにカロッサが〈時間による距離〉を置いてある人物を作品の中で昇華して描く例としてこの二人を紹介してみたい。

アルベルト・クッシェル (Albert Kuschel) は、カロッサが軍医をつとめたバイエルン第十九予備歩兵連隊第二大隊の少佐だった。当時37歳のカロ

ッサより14歳年長で北ドイツハンブルクの出身だった。『日記』では数箇所をのぞいて「指揮官 (Kommandeur)」 「少佐 (Major)」,あるいは「MK (“クッセル少佐”のドイツ語の頭文字をとったもの)」と略記されている¹⁰⁾。『ルーマニア日記』では「少佐」としてのみ登場している。北フランスに着任早々この少佐に会った印象を「發育不全の鳥のように小さな頭部」(9月4日)を持った男、と意地の悪い寸描から始めているが、少佐に対する言及が多くなり言葉使いが辛らつさを増してくるのはこの大隊が東部のルーマニアへ列車で移動し始める10月15日頃からだ。「指揮官はよく罰を下す」「私がきれいな車室でゆったりと快適に過ごしているのを見るのが指揮官には気に入らない。医療軍務関係の書物を持ってきて眼を通しておくようにと私に言う」(10月15日)「指揮官のことで激怒」(10月16日)「指揮官は兵士たちが歓声を上げたり叫んだりすることをなんとしても止めさせたいと思っている。そんなことはうまく行くはずがないのだが。彼は車室にいつもひとりであって、いやみな事を言い続けている」(10月17日)「指揮官は兵士との接触がほとんどない。兵士と自分との間の大きなギャップを埋めようとせず、しかも気の毒なことに少しも威厳というものを持ち合わせていない」「指揮官は砒素の毒のように私に作用してくる。生涯決して付き合いたくないような人間と日々かかわらなければならないのが戦争だ」(10月19日)「MKについて。絶えず激した指揮官の声が響く。彼は目の前の兵士にことごとく命令口調でがなり立てる。しかし相手はまったく意に介さない。そもそもわれわれバイエルン人は彼のことが全然理解できない。ほとんどいつもこの指揮官の高慢な命令が実行されないことがのちに判明した時、私の見方が正しいことがわかった。こうした見かけだけ活発な人間はいつも空回りしているだけだ、ということをいつかわからせてやる必要がある。

10) これ以降『日記』からの引用はすべて „Carossa Tagebücher 1910–1918“ Insel Verlag 1986から行い、1916年の月日のみをカッコに記していく。翻訳に際して臨川書店『ハンス・カロッサ全集』9を参考にした。

彼らには説得力がなく、かれらが使う言葉の背後の人間性は普通の兵士にも見抜けるのだ」（11月19日）

こうした激しいカロッサの人物評は、彼の作品や手紙の中でもめったに出会うことはない。バイエルン人とプロシア人の古くからの対立意識もここに働いているのかも知れないが、こうした辛らつな言葉から、非日常的な体験を刻々と重ねていく中で自分を抑えきれないカロッサの生々しい心の動きが伝わってくる。クッシェル少佐は、しかし頑強な体の持ち主ではなかった。坐骨神経痛に悩まされ、医師のカロッサからしばしば治療、投薬を受けるようになった。時とともにカロッサは少佐の虚勢を理解し、同情心を持つようになる。日記集の編者は「注」のなかで、この二人の関係は当初険悪な状態だったが、戦況の変化、時間の経過とともに「両者のあいだにある種の敬意が芽生え」た、と述べている¹¹⁾。クッシェル少佐は第二大隊の指揮を1917年6月まで取った。しかしこの『日記』後の日記が残されていないので、その間のカロッサの心の変化を跡づけることが出来ないが、すくなくともカロッサからの「ある種の敬意」がどのようなものかは、次の『ルーマニア日記』10月21日の記述を読めば明瞭である。

この小さな老人はいつも不機嫌で小うるさく、強情だ。しかしこの態度は下級兵士にだけでなく、上官に対しても同じなのだ。軍隊ではめずらしいことだ。自分のまわりにいる兵士を居心地よくさせない。しかしわれわれはこの戦地に居心地の良さを求めに来ているのだろうか。彼は節度と冷静さを強要する。そのお蔭で私は健康ですがすがしい気持ちでいられるのではないだろうか。われわれをいらいらさせる者は、やさしく応対してくれる者より結局われわれを力づけてくれるのではないだろうか。この小さな年老いたデーモンはすでにわれわれの一員であり、われわれの運命の一部になってしまっている¹²⁾。

11) „Carossa Tagebücher 1910–1918“ Insel Verlag 1986 S. 507

12) „Hans Carossa Sämtliche Werke“ I.Band Insel Verlag 1979 S. 410

『日記』であれほど酷評された人物は時間という距離、時間のふるいにかけてカロッサの作品に描かれると、このように変貌し、ポジティブな光の中にあらわれる。ここにカロッサの人間観の奥深さ、懐の深さ、思いやりの痛切さを読み取るべきだろう。

『日記』の中で手きびしい批評を下した人物がもう一人いる。それがマイアー司祭である。ルーベルト・マイアー（Rupert Mayer）は当時バイエルン第八予備師団内の三つの連隊を担当したイエズス会の従軍司祭だった。『日記』では12月30日の爆撃で重傷を負い、脚の切断手術を受けるまで実名で言及されている。

イエズス会の師団付き司祭が馬上でわれわれを出迎えてくれる。エネルギーで才気に満ちた顔つき。最初に出会った人の中でもっとも興味のある人物。とても自信に満ちた態度をしていたが、大変礼儀正しい人だった。第一級鉄十字勲章は他の師団付き医師より彼のほうがずっとふさわしい。（……）この戦地になれた司祭が戦場でも際立った勇敢さを示したということ、28センチ砲の爆撃の際にも果敢に行動し逃げ隠れしなかった、という話を聞いてとても嬉しく思った。このとき彼にまた会えればと思ったが、そうなることが良いことなのかどうかは分からない。人との付き合いははかないものだ。（9月7日）

きわめて肯定的、好意的な出会いの印象、描写からはじまっているが、最後の文の再会が「良いことなのかどうかは分からない。人との付き合いははかないものだ」という文は、深読みかも知れないが、意味深長な言葉である。

この司祭は赤ら顔をしていて、息をはずませあえぎながら、かすれた声で話す。聖職者のおごそかさと近寄りがたい雰囲気を持っているが、子供らしい

肉感的な表情が上まわっている」(10月29日)「人間のこころの奥底が見えるときがある。温和な司祭でさえ勲章への欲望に燃えている。すんだ月夜、強風。ここでの生活の全体は宮廷生活に似ている。この上なく丁寧な立ち居振る舞い、明朗な社交術。しかし内心ではみんな自分自身が大事なのだ。司祭のさまざまな顔。時どき垣間みせる彼の眼差しの冷酷さ、どん欲な口元。(11月8日)

最初の出会いの印象が少しずつ失望に変わりはじめ、ルーマニアの山岳地帯を転戦する苦しさ、時おり起こる自分の疾患の痛みにも耐えつつ、軍医としてのきびしい生活を送るなかで感覚が研ぎ澄まされ、とくに軍隊内の人々とのつきあいに余裕を失っているカロッサの心理状態がこれらの手記の背後から見てとれる。クッシェル少佐に対しても同じ精神状態だったのであろう。こうした精神状況にあってもカロッサは、すべての人々を鋭敏な嗅覚のままに厳しく批評したわけではない。同僚の軍医ルージュ、従卒のレーム、ファイト少佐など人間的に好感を覚える人々にも取り囲まれ、宿营地となった一般の人家の住人たちから受けたもてなしをしばしば感謝の念をもって書き記している。その意味でこの『日記』にはカロッサの人間への好悪がストレートに出てしまっている、と言えるだろう。

11月16日の日記への追記。わずかな焚き火のまわりにうずくまっている重傷のルーマニア兵を前にした司祭。私はつねに愛情に満ちたこの司祭が意識を失いかけた重体の敵兵でもあり友でもあるルーマニア兵の前に進み出て、「敵を愛せ！」の戒律に従って、瀕死の人間に向かって心からの言葉をかけてほしかった。しかし彼はその場を動かず、背を向けた。単なるカトリック教徒であって真のキリスト教徒ではない！(11月17日)

『日記』中一番痛烈なメモだと思われるが、この追記はカッコつきで残されている。おそらくこれまで引用してきたクッシェルやマイアーへのネ

ガティヴなメモは、まさしく「出版を意図したもの」ではない。作品としての『ルーマニア日記』の素材・資料として長い年月くり返し参照してきたものが、とくに破棄されずに残ってしまったのであろう。ただ次章に述べるように、クッセル少佐の略記と同じように恋人のマリアを一貫して略記と匿名で記しているのは、『日記』が他人の目に触れる可能性をやはりどこかで意識しているのではないかと思われる。そもそも日記を書くという行為は秘密裡にいとなまれるものだとしても、そこにはなにがしか他者の目が意識されている。

ところでマイアー司祭に関して『ルーマニア日記』では、11月14日に「死んでいく兵士たちのもとにおもむき親しく言葉をかけ、聖油を与え、遺言と最後の望みを尋ね歩く司祭」として数行客観的に描かれているだけで、他の記述は見つからない。むしろ『日記』から17年後の『指導と信従（ある回想の書）』（1933）のなかでカロッサを戦場で精神的に支えてくれたひとりとして実名をあげ5ページにわたって述べている。その中に次のような一節がある。

従軍司祭の仕事をすこしも休むことなく苦しみに耐えつづけた、と聞いたこのまじめで物静かな司祭のことを精一杯思い起こすことは、長い期間私の疾病の痛みをやわらげる効果があった。自分の絶望的な気持ちをこうしたお手本にすがって耐え、目に見えない人から少しでも力をもらおうとした。このようにして私はつらい日々を幾度ものり越えていった。（……）司祭との関係は私にとって、何人かの優れた人物との関係と同じだった。彼の人を癒す力は近くにいる時より遠く離れている時のほうがずっと強かった。結局われわれはみな多かれ少なかれ蛍に似ているのかもしれない。手にとると黒い昆虫にすぎなくとも、飛んでいるとすばらしい光を放つ蛍のように¹³⁾。

13) aa.O., S. 741

時の流れの中にある自浄作用とバランス感覚の行きとどいたカロッサらしい文章であるが、蛍の比喻は微妙なニュアンスと読後感を私に残す。いずれにしても戦争という極限状況の中ではどんな人も、人間としての厭な側面、危うい側面が露呈してくる。こうしたいとわしい側面はしかしその人の生命力と一体となっている。こうした人間的な理解をカロッサは、時間をかけた書くという行為の中でじっくり深めていったに違いない。そのことはクッシェルとマイアーという二人の個性的な人物描写のなかであざやかに証明されている。

IV

カロッサの女性関係については、日記集巻末の編者による年譜による以外詳しいことはわかっていない。この『日記』を書いていた当時カロッサには最初の妻ヴァレリーと10歳になるハンスという息子がいた。戦後、妻のヴァレリーは病気がちで、1941年に死去する。カロッサはこの時63歳。その2年後第二の妻ヘトヴィヒ・ケルパーと正式に結婚するが、彼女とは1926年に知り合い、1930年にはすでに長女エーファをもうけている。このエーファが書簡集3巻、日記集2巻の編者である。いずれにしてもこの間の事情はつまびらかでないし、作家自身もほとんど触れていない。自伝的作品あるいは回想風の著作の中でもプライベートなことはあまり書かない作家であるから、この辺の事情を知ることは今後もむずかしいかもしれない。

しかしすでに触れたように1915年からのアウクスブルク軍事教練期間に知り合ったマリア・デームハルター(1890-1965)との関係は、この『日記』と書簡からかなりの程度うかがい知ることができる。もちろん『ルーマニア日記』、『指導と信徒』の中ではひとことも触れられていないし、実名でも出てこない。日記集の編者によれば「カロッサがマリア・デームハルターと知り合ったのは1916年の初夏で、彼女はアウクスブルクの学校の教師をしていて、近郊の両親の屋敷に住んでいた」。書簡集は5月16日のマリアへの手紙からはじまっているが、北フランスへ出征し、10月に東部戦線に

移動、10、11月をルーマニア高地を転戦する間も彼女への情熱的な手紙はつづく。マリアへの手紙は、翌1917年からカロッサの死の直前の1956年まで（書簡集には5月24日付の手紙まで掲載されている）続いているが、この出会ってからのはじめの半年間のカロッサの体験と心理的变化が以後の二人の関係のあり方を決めていったように思われる。

北フランスの戦地に赴いたあと、マリアに対する抑えられない思いを『日記』につづり始める前に9月5日の彼女への手紙で次のように愛情告白している。

いとしい人！ 心にもう一つの場所を持っている人は、たくさんの厭なことを易々と避けて通れるのです。きょうの昼の暑さなか、ひとり私はこの道を歩いてきました。戦場に行く兵士というよりさすらい人のように。そして道端にすわり、日記を書きつけました。同時にあなたのことを思い、私に語った「あなたを愛していることを忘れないで！」という言葉の思い起こしていたのです。まだ覚えていますか？ 書き始めた幼年時代の主人公の子供のイメージを私は抱きつづけています。このイメージは心を穏やかに、厳肅に、また人間への信頼感を与えてくれます。しかしそれではまだ十分ではありません。あなたのような人がこの地上にいるということ、全身全霊で私を愛してくれているということ、このことが私の生活を——決して楽にしてくれることはありませんが——大きく広げてくれているのです¹⁴⁾。

『日記』には9月7日からマリアへの思いが表出されている。引用文のMやMDは、もちろんマリア・デームハルターのことを指している。

アウクスブルクの聖霊降臨祭以来私を苦しめてきた恋の情熱と比べれば、この戦場でのひもじさと苦労はさして身にこたえない。もしMがあれば聡

14) „Hans Carossa Briefe I 1886–1918“ Insel Verlag 1997 S. 209

明で活発な性質の女性でなかったら、きわめて危険な状況になっていたかもしれない（9月7日）。

晴れて、暖かい日。夢のようなすばらしい午後。カンパニョラ、ペピ、ウネルトル、そしてMDから手紙（9月25日）。

あたたかな秋の日。家族とシュティーヴェ嬢へ便り。MDの告白（9月26日）。

同じ夢の途中でなんども目を覚ます。営内病室の患者を診ていると、ドアー代わりのカーテンから黒の衣服と毛皮のコートを身にまとい、鳥の羽根のついた黒の帽子をかぶったMが現れた。いくらか地味な服装だったが、「彼はもうそのことを知っているのかしら？」と尋ねるとまたどこかに行ってしまった。そこですぐ目が覚めた。そのあとの夢でMは私の手を取り、町の路地や工場付近を速足でつれ回り、気がついたらヴァイバーシュレーの酒場にいた。するとそこにさまざまな階級の将校たちがやってきて、私は目を覚ました（9月30日）。

夜になってMが病気でベッドに寝ている夢を見た。家には訪問客が来ていて私と酒を飲み、話をしていた。かれらの相手をして、ときどき階段を上がっていったのは彼女の容態を診ながら「あなたを愛している」と伝えに行く夢だった（10月9日）。

東部戦線へ移動する前の北フランスの前線からやや離れたところで、軍医として仕事を務めるかたわら、激しい砲撃音を遠く耳にしながら彼女への思慕を抱きつづけるカロッサの姿がここにある。前線での実際の勤務にとまどいながら、マリアに何通も長い手紙を書き、その一方で後の『幼年時代』のいくつかの章を断片的に書き続けるこの作家は、9月7日の日記にあるように恋の情熱を持てあまし、戦争の悲惨な現実がまだ目に入っていない。すでに述べたように「敵兵を殺す必要のない、戦場で唯一中立の立場をとれる医者」という身分と役割の中で、カロッサは前線の後方で戦争を知覚体験し、まどろんではマリアの姿を追い求める。

しかしこの状況は東部戦線への移動がはじまった頃から少しずつ変化してくる。彼女への思いをつづる箇所が少なくなり、日記はルーマニアの山岳地帯を進軍する途中で目に触れた自然風景、ハンガリーやルーマニアの特徴ある建物や家具、戦争で気がふれた女性たち、さまざまな国の兵士たちに関する記述が多くなる。次の章でも引用するが、12月半ばルーマニア兵、ロシア兵との戦闘が激しくなるまでは比較的穏やかな形での行軍がつづき、マリアへの思いも次第に落ち着きははじめ、戦地でのカロッサの目も冷静さを取りもどしていく。折々『幼年時代』を書き進め、ルーマニアの自然、天候、植物を描写しつづける。戦場での細部にこだわった自然描写は、やはり詩作品へと発展、完成するデッサン、スケッチという趣がある。12月半ばまで妻ヴァレリーからの手紙、贈り物も届き、息子ハンスを気遣う手紙を送り、家族の夢を見る。この時カロッサはマリアを思いつづけながらも、遠い戦地で文筆と家族と自己のあり方を距離をおいてあらためて観察し直し、思索しつづけていたにちがいない。

上の引用にもあったが、カロッサの作品には夢の記述が多く、そこになんらかの象徴的意味を持たせる場合があるが、『ルーマニア日記』でもしばしば夢の場面が出てくる。しかしそこでの夢は女性をめぐるものも多く、虚構化されていて、かえって複雑・曖昧な意味になっている。この『日記』でも夢は頻繁にあらわれ、当然のことながらかなりの夢がマリア・デームハルターと関連した女性の夢が多い。それはかえって戦場の男たちの夢として素直な気持ちの表出という印象をうける。12月10日の日記には、宿泊したルーマニアの民家にいた主婦と娘二人に対して「健やかな女性が近くにいること(Urnähe)は、他の何にもまして気持ちが癒される」と書き記していて、カロッサの女性的なものへの憧れを率直に表現している。

5時15分までぐっすり眠る。夢を見る。田舎の、赤みがかったブロンドの髪の子がいつも傍にいた。彼女は私の愛撫を拒むそぶりをするので、それがいっそう甘美なものになった。つぎには突然あつい夏の午後ひとりである自

分がいた。真夏にひとりぼっちでいる者がもつ憧れと哀しいところを抱いて。しかしすべてに女性の影が漂っていた（12月31日）。

この夢でこの年の夏のはじめマリアと出会ったことを思い返しているのかもしれない。こうした異性に対する実に素直な告白に対しては何もつけ加えるべき言葉が見つからない。

『ルーマニア日記』では12月15日に、『日記』では12月13日にカロッサは大きな危機を体験する。

奇妙なことに私の運命を左右する星は、この日に集中していたに違いない。東方の三博士（行軍するレーム、ラープ、カロッサの三人をキリスト生誕に際してベツレヘムを訪れる三博士になぞらえた。訳者注）。恐ろしい午後。包帯所が爆撃される。ショーシュテレクに移動するよう命令をうける。出発するやいなや路上が爆撃される。引き返すことも考えたが、前進した方が得策であるように思われた。急いで前進。左右に榴弾が降ってくる。うなりを上げて頭上を通り山岳砲兵隊の近くに炸裂する。最も危険な場所を通過したと思ったとき、近くに一発着弾。直後に砲弾のうなりが聞こえ、その瞬間私は至近距離で爆発すると直感する。実際考える間もなく爆発。われわれはほとんど土にうもれた状態になった。私は本能的に体勢を低くして頭に手をやり炸裂する破片を防ごうとした。負傷していないとすぐに気づくが、土くれが頭皮にべったりくっついていて、よく洗わないと取れないほどだった。従卒のレームの方を見る。ぬかるみにすっかりはまってしまったようなひどい格好をしている。その時彼が笑ったので、私もつい笑ってしまった。軍帽は頭になかった。レームが拾ってきてくれた。

この短文と単語から書かれている日記の描写は、間近に着弾した瞬間と、直後に無傷である自分を従卒レームの動きの中に確認する「私」カロッサの姿を異様な迫力で伝えている。おそらくここで「私」は戦場での一つの

死を体感したのかもしれない。きわめて醒めた、乾いた意識で。こうした瞬間、人間は「つい笑って」しまうことしか出来ないのかもしれない。そのあと時間がたち、ふり返る余裕が生じてから自分が生きていることをあらためて実感する。少しあとの12月28日にマリアに宛てて「12月13日は風前のともし火という状態でした。あの日以来、私はこの世での生命をあらためて与えられたように思えます。それは厳粛なことであり、同時に悦ばしいことであります」と語っている¹⁵⁾。こうした「死」を経験した翌日、アウクスブルクで二人に関する噂が広まっている、という内容の手紙が届き、それに対して次のようにマリアに返信する。

レンナー博士について書いてくださったことは、あなたにとってとても辛いことだと思います。こういう噂話のたぐいは、現在置かれている戦線任務の苛酷さのために私の心に響いてこないのです。しかしわたくし達が幸せだったあの町と風土から離れられないあなたは、憎むべきあの人々を避けることが出来ません。あなたはなんと辛いことを耐え忍ばねばならないのでしょうか。ほとんど人付き合いのないレンナー博士でさえああした話を口にするのですから、これはアウクスブルク連隊すべての噂話になっているにちがいません。しかもわが大隊にはたくさんのアウクスブルク出身の兵士がいるのですから、うわさが広がらないわけがありません。私はすこし疲れがたまっています。一週間の休養がなんとしても必要です。この前など寒い夜に森を行軍し、ハンガリー兵の無数の大きな露営の焚き火が燃える、雪と月に照らされた谷あいへ降りて行くあいだ、あなたのことを考えていました。今年の夏のつらくて深い愛情に満ちた数ヶ月は夢のようにすばらしい時でした。すべては順調で、人々は私たちを静かにして置いてくれました。愛は永遠を求めます。死の奇跡にも近づこうとします。私に死の恐怖はありません。すでになんども深く死を味わったからです。私たち二人の間のすべてのすばら

15) aa.O., S.230

しかったことは、二度と繰り返すことはないだろうと時々感じます。それほど比類ないものであったのです（12月14日）¹⁶⁾。

ここでカロッサは数ヶ月前までの恋の嵐をほとんど懐古的にふり返っている。「なんども深く死を味わった」という言葉は、前日の爆撃からの奇跡的生還からの思いばかりでなく、日夜瀕死の兵士を診る中でこの数ヶ月身近に感じとってきた医師としての真情でもあろう。こうした深い死、奈落から這い上がってきた人間は、自分のこころの中の根本的ななにかが変容しはじめる。今まで執着していたものに距離が生まれ、それまでの生活内容が新たな意味づけを求めてくる。「二人の間のすべてのすばらしかったことは、二度と繰り返すことはないだろう」という言葉を、これからの彼女との関係の継続ととるか、その停止、あるいは留保ととるか、解釈のむずかしいところだ。しかしこの文面から、カロッサのこころの中でマリアへの気持の変容と距離、あるいは留保が生じたように私には読み取れる。こののちカロッサとデームハルターの関係はこれ以上発展することはなかった¹⁷⁾。

すでに述べたように以後の作品の中でマリアとの関係を示唆するような文は書かれていないが、『指導と信徒（ある回想の書）』の中に次のような記述がある。

アウクスブルクの第三歩兵連隊で軍事教育を受けた。この期間は、心肺機能がまったく正常な健康人だけを相手にすればよかったので、それだけでも楽しかった。それ以外にも十分な余暇があって、私は噴水の流れ出る古都を見物することができた。この町で、かつて祖父は裁判官をしていて、母はマリ

16) „Carossa Tagebücher 1910–1918“ Insel Verlag 1986 S. 532 f.

17) カロッサとマリアとの関係については次の論文がある。小鏈千代「マリーア宛書簡に見るカロッサ像」杏林社会科学研究 研究叢書No.3 所収 1993

ア・シュテルン修道院付属学校に通っていた。郊外のゲッギンゲンには私の友人がいて、陽気で善良な農家の人々が落ち着いた生活を営んでいた。この人々は、あらためてまだ損なわれていないドイツを思い出させてくれた。こうして私は、アウクスブルクでの滞在の本来の目的をしばし忘れ、母のことをたえず思い出していた。彼女は生涯にわたり、シュヴァーベン土地の人々を何にもまして賞賛していた¹⁸⁾。

1910年に亡くなったカロッサの母（マリア・カロッサ）もデームハルターと同じように、かつて教師をしていたが、この回想風に述べられたアウクスブルクの「農家の人々」のイメージの中にはたしかにマリアがいて、彼女の中にカロッサは「母」を見て取っていたのかもしれない。あるいは母の強いイメージを通してマリアという女性とめぐりあったのかもしれない。

V

これまでおもに、作品では見られないカロッサのプライベートな側面、厳しい人物評を日記と書簡から紹介してきたが、この章では戦争文学としての『日記』という視点から興味深いと思われる箇所を抜粋、引用してみたい。この点は論証するよりも、まず読者に読んでもらわなければならないからだ。

人里離れた、新鮮な体験に事欠かない、しかし絶えず危険と隣り合わせの状況にいと、人は自分の過去を山頂から見渡すことが出来るような気持ちになる。詩のことを心に思い浮かべると真実なことだけが心に残る（10月24日）。

テント内の地面の上で夜を過ごす。2枚のシーツ、手編みのベストと腹帯

18) „Hans Carossa Sämtliche Werke“ I. Band Insel Verlag 1979 S. 724

があっても寒さがこたえる。しかも私が横になっている所に杜松の木の根があり、その曲がった部分があばら骨に食い込んできて、何度も目を覚ました。わき腹の激しい痛み。キシハヴァシュ山の素晴らしい朝。つめたい風。フォン・シュタイン閣下、ラーブは衛生車へ。午後やっと体調不良を克服。冷たく澄んだ空。わずかな雲(11月5日)。

早朝5時半予定の小規模攻撃について打ち合わせがある。シーヴォシュに並行した丘にルーマニア兵の監視所があり、わが軍の側面をおびやかしている。この丘を第一中隊が奪取する計画だ。夕方新しい寝場所へ移った時にもオーストリア側の激しい砲撃が続く。墓場のような冷気。実際に墓穴のような中に横たわっている。われわれを収容することに決められていた大きな長方形の窪地は、午後掘られたばかりだ。壁からは針金がたれ下がり、またローソクが固定されていた。ロウが時おり毛布にしたたり落ちてくる。しかしみんな疲労困憊でまもなく眠り込む。熟睡(11月6日)。

戦争の目的意識を持った兵士の中にあつただ一人その意識を欠き、戦での功名心を持った者たちの中で、全く功名心のない者として生きることは奇妙な感じがする(11月10日)。

早朝重傷を負った一人の兵士。胸に2発の銃弾、心臓が弱っている。アラク入りの紅茶で生気が戻る。朝、敵の砲撃がはじまり、われわれの近くに榴散弾が落ちる。クッシェルの無神経さ。9時過ぎ、砲弾が近くに落ちる。味方の砲兵隊をねらう。敵機襲来。すばらしい天気。肋骨の痛みが再発。ルーマニア軍の激しい攻撃でわが軍に多大の犠牲者。無神経な少佐もさすがに援軍の増強を要請。また死者が出る。榴弾の破片がわが軍の間近に落ちる。1時、戦場に信じられない静寂が訪れる。小屋の建設を終わらせなければならない。明日われわれは交代させられるという情報。小屋の建設。中佐の訪問、お誉めの言葉。負傷者がつぎつぎと運ばれる。

標高998メートルの高地は、ショーシュメゼーの北。頭部を撃たれた重傷の兵士。衛生中隊が到着。シュヴァープ少尉が負傷。表情から本国に送還される喜びが見てとれる。少尉は、ルーマニア兵の粘り強さと勇敢さをたたえ

る。重大な情報がある。シーヴォシュとシャンドル間が突破される危険があるという。音楽と酒で興奮状態にある敵兵が8回の波状攻撃で手薄なわれわれの防御線に突入。この被害をうけた中隊の前20～50メートルのところに一個大隊が迫る。この敵兵たちは、クラウス少尉の戦死で激昂した味方の勇敢な兵士が疲労していくのをじっとうかがっている。交代はなし、という命令が下る。避難壕の野営の焚き火が心配。ワーグナーはあきらめずに電話、その際一枚の地図を書いている。指揮官も最後には師団に増援部隊要請を決意。

戦闘の激しくない前線配置を望んでいた二人のオーストリア兵の不機嫌な顔。私はさらに12名の担架兵を要請する。マイクスナー、司祭。彼と私は起きている。他の者達は次第に眠り込む。とうとう私にも眠気が襲ってきた。まもなくマイクスナーに起こされる。真面目で、やさしく美しい童顔の兵士の顔が銃弾で識別できないほどになっている。彼はひとつの言葉をうめき続けている。「のどが渴いた」と言っているように私には思えた。聞いてみたが答えがない。兵士の歪んだ顔は、真夜中の緑色の月明かりの中で肥大し、輪郭があいまいになっている。コーヒーと水を持ってこさせる。がぶがぶと飲み込む。しばらく迷った後で私はやはりこの兵士をバレットまで運ばせることにした。そこまではおそらく生きていないであろう。

夜も散発的に銃撃がある。時どき機関銃で毒ガス弾をうってくる。ルーマニア兵は酩酊状態で軍楽隊の曲に合わせ歌とともに突撃してきた、と味方の兵士たちは口々に語っている。人を極端にまで追いやる音楽の魔力。ゲーテのすばらしい詩をかれらに朗読して聞かせたら、また違う効果を発揮するだろう。小屋にもどって横になるがなかなか寝つかれない。早朝ふたたび頭部を銃撃されたふたりの兵士が運び込まれ、起こされる。一人は意識がない。もう一人は顔が青緑色にふくれ上がり、落ち着かず絶えず外に出ていこうとする。朝方すこしだけ眠る。澄んだ晴れた朝（11月11日）。

12日から13日にかけての夜は騒然としていた。多数の負傷者。深い霧。欠けた月がわずかに明るい。司祭と話す。銃撃音は止むことがない。救護用

塹壕の片すみで死んでいく兵士。眠ろうとするたびに起こされる（11月13日）。

霧が深くなる。白い子犬がついて来る。追い払ってもなおついて来る。連隊司令部まで来てしまう。ちょうど失った高地を昨日第三大隊が奪還した、という連絡が入る。70人の捕虜。連隊付軍医フェレラーを訪れる。おびたらしい怪我人。滝のような雨。さらに前進する。3時半、森にテントを設営しはじめる。雨また雨、焚き火、テント、凍るような寒気、湿気。郵便が届く。マイヤー司祭と別れる。彼は瀕死の兵士のところで終油を与える。ハナゴケ。雨がますますひどくなる。のち少し弱まる。テント村が森のいたるところに点在する。煙と霧。寒気。煙がひどく焚き火のそばにいられない。凍死か窒息死。激しい砲撃が続くなか、早くに就寝する。擦り切れた靴を脱ぎ、かわりに靴下を二重にはく。なんとか寒さがしのげる。テントの入り口付近の焚き火にゆらめく空気を通して背後の森が透視できる。トウヒとブナの木。指揮官の怒り。自分のような年上の上官を湿った地面の上で寝かせたままにして、高地で快適に過ごしている連隊本部の若い連中がけしからん、と言うのだ。まもなく目覚めてしまう。楽しげで不思議な非日常世界の夢。ふたたび眠り込む。寝ているシーツを通して水が染みしてくる（11月14日）。

12時出発。ヴァレリーとシュティーヴェ嬢からの嬉しい贈り物。夕方露営地を歩く。つらい気持ちになる。明後日多くの兵士が死ぬであろう。しかしわれわれもどうなるか分からない（11月15日）。

1時半に起床。寝過ごしたことを指揮官は怒っている。濃い霧と小雪のなかを進軍。けわしい山と谷の行軍は疲れる。すべりやすい道。多くの兵士が転倒。5時ハレスルに到着。シュヴェンク少尉のところで暖を取る。彼の小屋の壁はイチイの木でできていて、壁にヴァイオリンが二つ掛かっている。ゆっくりと夜が明ける。大隊は前方へ移動、われわれもその後を追う、未知の領域へ。負傷した兵士を見かけ、路上で治療する。その数はだんだん増えてくる。ハンガリー大隊で休憩させてもらう。かれらは自分たちの救護用塹壕を使わせてくれる。たくさんの負傷兵。1053メートルの高地へ進むよう命

令が下る。この高地は最初の包帯所から進軍した時わが軍によってすでに攻略されていた。攻略された二番目の山はレンクル山、標高1108メートル。コルブ副曹長が戦死。山を登る。ドイツ兵とルーマニア兵に出会う、重傷の兵士がいる。ルーマニア兵はケガをした兵士を運ばなければならない。あらゆる方角からの砲撃。激怒。再び退却の命令が下る。ケガをした者、死んでいく者。ガール。一日があつという間に過ぎていく。午後500歩先でルーマニア兵の攻撃がある。砲弾が近くに落ちる。無数の銃弾が音を立ててわれわれの窪地をかすめて行く。ぞっとする光景だ。お互いに不安な面持ちで顔を見合わせる。捕虜になったルーマニア兵の嘆きとうめき。兵士たちがわれわれの腕の中で死んでいく。夕方オーストリアの衛生士官がやってくる。一時間激しい爆撃がつづいたあと、静かになる。最初の深い眠りから電話で起こされる。担架兵についての問い合わせ。戦場での数多くの電話連絡と同じように意味のない通話。降雪がひどくなる。暗闇で迷う。そのとき照明弾が上がリ、数秒間冬の夜の森を照らし出し正しい道を教えてくれる。(緑と白の光が降ったばかりの純白の雪を照らし出す)満足できる露营地。寝ている顔に雪が落ちてくる(11月16日)。

何日ものあいだ喉が渇きつづける。丘のふもとの貯水池の水を飲むのが怖い。腐乱した死体が融けて混入しているからだ。ゼーシュテッテンの森の描写。税関の監視所を経由してオイトズ峠へ。オーストリア兵からビールと葉巻をもらう。ひどい道を行軍。オイトズ峠に着いたときは疲れ切っていた。体調がおかしく、よく眠れない。理由はわかっている、行軍中に体力を消耗し切ったせいだ。一瞬の間心臓が止まるかと思った(11月21日)。

ケーズディ・アルマーシュへ。ひどい健康状態。痛みが増してくる。心臓の具合がおかしい。みんな私がひどく疲れていることを察知してくれて、しばらく休ませてくれる(11月22日)。

午前10時45分ケゼーブロックを出発。前線から3キロの地点で露營するはずだったが、変更になってしまった。わずかな昼食時間。人の住んでいない家々を見ながら、原野に立ったままで食事をする、指揮官は馬上で。さらに

進軍。谷の住人たちの驚いた顔。はじめ兵士たちは河をびちゃびちゃ面白がって歩いていた。われわれが行軍している川床は大部分砂利になっていた。そのうち家並みが途切れ、さらに奥へとすすんでいった。ほとんど垂直の斜面と山道の険しい山。(……) 渡らなければならない川幅は次第に広くなり、しばらくの間ひざまで水につかった状態で前進する。冗談を言う気もなくなる。馬から下りて歩く山道と、乗馬して渡る河が交互につづく。強情な馬、他の馬がいないとじっとしていない。とうとう転倒。馬にも私にもケガはなかった。(……) われわれは眠っている時いつでも出撃できる態勢でいなければならない。それは実につらいことだ。兵士は水の入った長靴を脱ぐことができないからだ(11月30日)。

VI

悲惨な戦場の兵士を悲惨なままに描写するのはある意味で容易なことかもしれない。この点で現在はカメラと写真が圧倒的な表現力を持っている。一方言語を媒介にする戦争文学は二十世紀末までには、その多くがルポルタージュ形式をとり入れたある面で無個性なものになった。それはルポルタージュ＝報告文学がもつ性質を考えれば当然な帰結といえる。報告者より事実に多くを語らせようとするからだ。また戦争そのものも無個性でハイテク化されてきたという点もこれまでの戦争文学形式が成り立たなくなったことと関係している。

はじめの章の高橋健二の引用にあったレマルクとカロッサの二人に関していえば、レマルクが『西部戦線異状なし』で残酷な戦場風景をそのままリアルに、露骨なまでに言葉で描出しようとした作家であるとするなら、カロッサは極力抑えた筆致で戦場のあり様を刻々と伝えている。戦場の残酷さと報告者の存在とその息づかいを同時に伝える文章を残した。カロッサはこれまで引用してきたような『日記』の記述様式や文体をそれほど意識的に作り上げたとは思えない。しかしこれらの文からは戦地で軍医としての役割をこなしながら、部隊とともに移動し、寝食を共にしながら必死

にメモを取る作家の姿があざやかに浮かび上がってくる。『日記』から彼の苦しい息づかいと祈りが戦場でのリズムとスピード感をともなって異様な迫力を持って伝わってくる。リアルさという点で物足りない、と言うならそれは想像力の不足からくるのであろう。カロッサは、戦場での手の施しようもない死を言葉による表現の限界と空しさを知りつつ簡潔に描く。負傷した兵士の傷とその血を生々しくそのままに描写しつづけることはない。それは他の作品の中で、医師として患者を描く際にも一貫してかわらない姿勢だった。人間の死の深さは読者自身が感じとるべきものだ、と言っているように私には受け取れる。

IV章までに作家カロッサの実像に迫るために、おそらく編者エーファ・キャンプマンのような親族が知りたくないような引用と指摘を行ってきた。それによって私は過去のカロッサのイメージをことさら壊す意図はまったくなかった。カロッサはやはり澄んだ温かいユーモアと抑制された情熱、静謐な筆致、品格を感じさせる作家であることに変わりはない。しかしこうしたイメージにしばられたままで作家と作品に接しつづけることは本当の文学研究とは言えない。

いずれにしてもこの『日記』は『ルーマニア日記』とはまた別の意味で個性的な戦争文学たりえている。両作品の描写の比較検討は紙数の関係で十分出来なかった。その点は読者に直接作品を手にとって読み比べていただくほかはない。